

第 31 回日本脳神経血管内血管内治療学会総会抄録

当院における椎骨動脈起始部 stent 留置術

片野雄大、赤路和則、望月洋一、志藤里香、木村浩晃、神澤孝夫、谷崎義生、美原盤

美原記念病院 脳卒中部門

(目的) 当院で2010年3月から2015年6月までに5例の椎骨動脈起始部狭窄に対するstent留置術を経験し、有用性について検討した。(方法) 当院の椎骨動脈起始部狭窄に対する治療の適応は70%以上の高度狭窄で、症候性病変または対側病変の合併としている。年齢は65歳から80歳。性別は全て男性。症候性は3例。(結果) 全例経大腿動脈法で行い、使用したStentは4例がPalmaz Genesis stent、1例がDriver sprit stentであった。また周術期合併症はなく、術後脳卒中も認めなかった。代表症例を提示する。71歳、男性。脳梗塞の既往あり。左頸部内頸動脈狭窄に対し、2015年1月に左CAS施行。その際に両側椎骨動脈狭窄を指摘。左椎骨動脈起始部に約90%の高度狭窄を認めたため、2015年6月、左椎骨動脈stent留置術施行。全身麻酔。右大腿動脈に6Fr sheathを挿入し、6Fr Envoy 90cmを右鎖骨下動脈へ誘導。右椎骨動脈の狭窄部遠位へ、Carotid GuardWireを留置し、distal protection。Gatewayで前拡張をし、6Fr Palmaz Genesis stentを留置。血管撮影上、良好な拡張が得られた。術後の拡散強調画像では高信号域を認めず、経過に問題なく、退院した。(結語) 当院における椎骨動脈起始部stent留置術は安全で有用であった。